

ジャンプアップキャンプ

令和5年1月21日(土)～22日(日)

【対象】小学校3、4年生

【場所】国立信州高遠青少年自然の家

1. 趣旨

自然の中でグループ活動を通して、自分の思いを基に行動する力や、多くの人とかかわりを持ちながら他者の気持ちに寄り添ったり、自分の思いを他者に伝えたりする力を育む機会とする。また、法人ボランティアが事業の企画運営をすることで、資質・技能を高める。

2. 事業の概要

(1)期 日 令和5年1月21日(土)～1月22日(日)

(2)参加者 23名

(3)日 程

	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1/21 (土)		受付	開 会 式	プ レ イ ス	自然を感じよう！ (課題解決 プログラム①)	宿 泊 棟 へ	つ ど い	夕 食	高遠の夜を 探検しよう！ (課題解決 プログラム②)	入 浴	就 寝 準 備	就 寝
1/22 (日)	6	7	8	9	10	11	12	13	14			
		起 床	つ ど い	朝 食	宿 泊 棟 清 掃 荷 物 移 動	思 い 出 に 残 る 作 品 を 作 ろ う ！ (創作活動)	昼 食	閉 会 式	解 散			

3. 企画運営のポイント

- ・ボランティアが活動プログラムを自主企画・運営することで、ボランティアの資質・技能を高める。
- ・小学校3・4年生という発達段階を踏まえた事業趣旨をボランティアが考えることで、ねらいに則した活動プログラムを企画・実施できるようにする。

4. 参加者・保護者アンケートより（一部抜粋）

- ・妖精さんたちの呪いを解くためのクイズが色々あって楽しかった。役に足りなかったり面白い内容だったりした。（参加者）
- ・（夜に）懐中電灯を持って外に出る！大冒険みたいだった！（参加者）
- ・高遠の夜は暗いから、ドキドキワクワクしました。（参加者）
- ・自分の作品をほめてもらえて嬉しかった。（参加者）
- ・知らないお友達と話したり一緒に活動したりすることによって自分にもできた！という自信につながったのかなと思いました。（保護者）
- ・最初はお友達がいなくて不安で仕方がない様子でしたが、お迎えに行った時の表情がとてもキラキラしていて、それだけで良い体験ができたのが一目で分かりました。（保護者）
- ・家族と離れて過ごすことで、自分のことは自分でやるということを学んでいるんだと感じました。（保護者）
- ・新しい環境にいても大丈夫という自信になったと思います。（保護者）

5. 企画委員アンケートより（一部抜粋）

- ・視野を広く持って、全体を見ながら、事業を企画するという、私自身一番弱いと思っていた力を少しでも養うことができた。
- ・色々なものを得ることができました。達成感、事業に関わり助けてくれる人の存在への気づきや、教育や子どもの成長について考える時間、考えの深まり、他者と協働して活動を作る楽しさや、自己理解の更新など、あげればキリがないくらいです。
- ・短い時間で有意義な会議を行うにはどうすればいいか、自分の思っていることや感じたことを発言する場は今でいいのかなどの、様々な思いを抱くことができた。
- ・今回企画をして得たものはたくさんあります。まずは目的をしっかりさせること、そしてその目的を達成するための手段を考える力です。これは教育事業だけではなく私自身の普段の生活や将来の目標に対しても言えると思います。

6. 事業中の様子

【課題解決プロ 林間しりとり】



【課題解決プロ 箱の中身】



【課題解決プロ ナイトハイク】



【課題解決プロ ナイトハイク】



【課題解決プロ 情報共有の場面】



【1日目 エンディング】



【創作活動】



【創作活動】



【作品を手に記念撮影】



7. 成果と課題

(1)アンケート結果 回収19名（回収率82%）

事業全体を通して	満足：19名	100%
	やや満足：0名	0%
	やや不満：0名	0%
	不満：0名	0%

(2)成果と課題

- 法人ボランティアが4か月をかけて作り上げてきた活動プログラムは、様々な場面で効果的であった。自然に興味をもったり、仲間同士で協力したり、新しく友達になった子と笑顔で関わったりする姿が随所に見られた。また、企画委員同士のかかわりや支え合いから、自己理解を深めたり、成長を感じたりすることができた。
- 知らない子同士の関係から、初めは個で活動することが多かった参加者であったが、徐々に班内や班を越えたかかわりが見られるようになった。班付ボランティアの子どもたちへ優しく垣根を作らないかかわり方も効果的であった。
- 活動の様子やアンケート等から、参加者にとって自然と触れ合うだけでなく、「自分のことは自分でやる」「自分自身をコントロールする」という自立に向けた一歩を踏み出す機会になった。
- 施設職員とボランティアの意思疎通がうまくできていない部分があった。活動場所の確保について行き違いがあったり、事業数日前まで活動プログラム以外の進行を誰がするか、認識にずれがあったりした。全体の運営や利用施設の確認に関しては、担当職員が主導して、ボランティアや他の施設職員と情報を共有していきたい。
- 企画委員と参加者のかかわりについては、企画委員が作り上げた物語の中だけとなってしまう、参加者とのかかわりがやや薄かったという声があった。企画委員も参加者と一緒になって行うプログラムを企画する等のアドバイスを企画段階からしていきたい。
- 大学の試験や卒業関係の行事と重なることが多く、企画委員による準備やボランティアの人数の確保がかなり難しかった。開催時期について、職員とボランティアが情報を交換しながら決めていきたい。